



虹のかけ橋

第48号/令和6年9月



兵庫県立但馬やまびこの郷 <https://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

こんな校内サポートルームだったらいいな

兵庫県は、昨年度より全県一丸となった「ひょうご不登校プロジェクト」を推進し、不登校児童生徒支援員の配置を支援するなど、「学校内の安心できる居場所(校内サポートルーム)」の設置に向けた支援に重点的に取り組んでいます。

当所が主催する教職員等を対象とした「不登校に関する研修会」において、「こんな校内サポートルームだったらいいな」をテーマに演習を行ったところ、多くの意見が出されました。

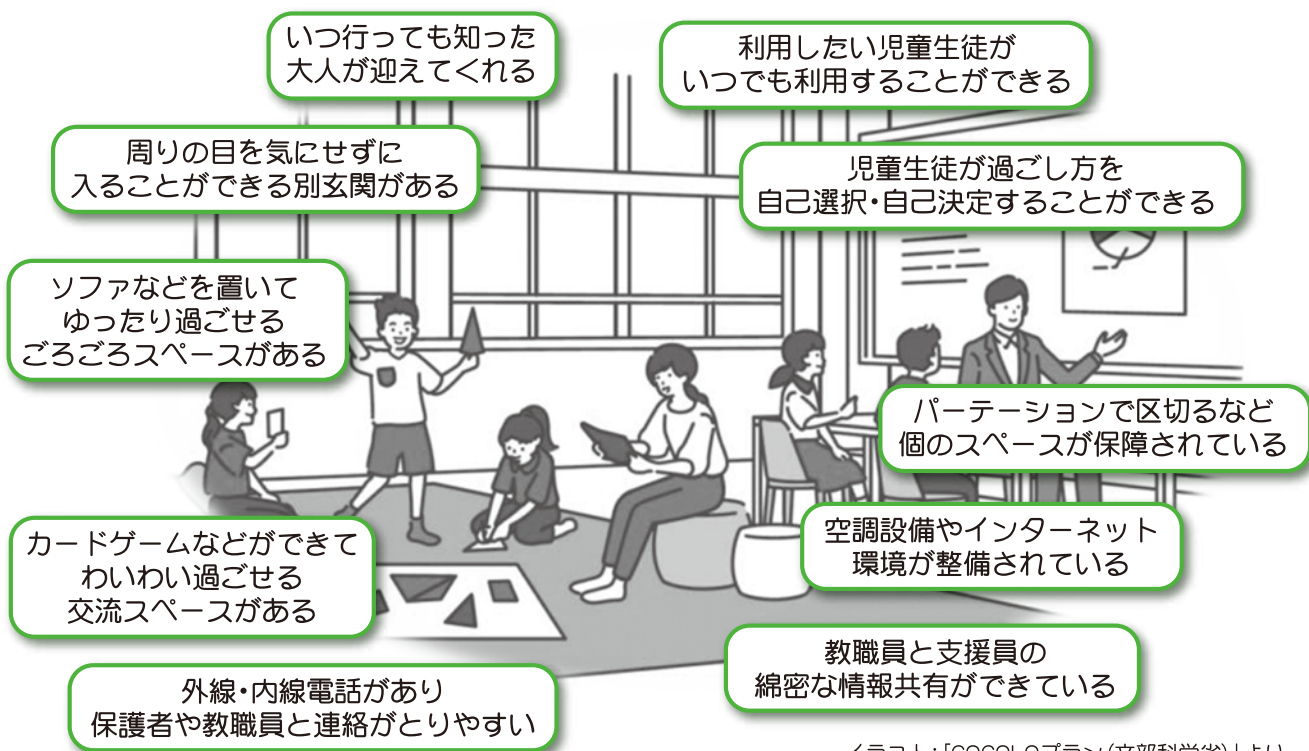


イラスト:「COCOLOプラン(文部科学省)」より

しかし

校内サポートルームの居心地がよすぎると、次のステップに繋がりにくくなるのでは？

と、心配する声もありました。→P4に続く

ソーシャルネットワークの視点で不登校を捉える

日本福祉大学 教授 野尻 紀恵

ソーシャルワークとは

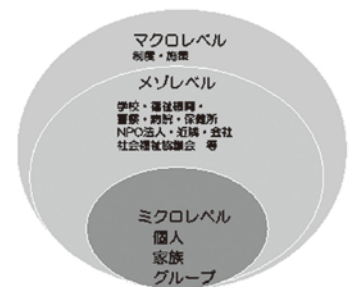
2014年に国際ソーシャルワーカー連盟と国際ソーシャルワーク学校協会から出されたソーシャルワークのグローバル定義は「ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。」というものです。

少し難しい定義ですね。わたしたちソーシャルワーカーは、この定義に価値を置き、専門職として活動しています。ソーシャルワーカーは、単なるサービスや制度の供給者としての福祉職ではなく、人々の暮らしに寄り添い、その方の生きづらさや抑圧、絶望の背景を見つめ、その「しんどさ」からの脱却を当事者と共に目指します。



生活体系の中で不登校の子どもの背景を見つめましょう

右図のように、わたしたちは、ミクロレベル、メゾレベル、マクロレベルという生活体系の中で毎日暮らしています。暮らしは、様々な「環境」の影響を受けているということがわかります。そのため、ソーシャルワークの視点で子どもの不登校の理由や背景を考えようとした場合、ミクロレベル、メゾレベル、マクロレベルそれぞれにおいて、「この子」にとっての背景があるかもしれない、と見つめていきます。



その問題は本当に問題なのかと考えてみましょう

学校には問題がたくさんある、といわれます。その一つに「不登校」が挙げられるでしょう。しかし、その問題は本当に問題なのでしょうか。「不登校」は現象です。子どもたちが表出する「症状」と言っても良いかもしれませんが。その症状には「原因」「要因」「背景」があるはずで、「症状」の奥にある「原因」「要因」「背景」に問題があると捉える、それがソーシャルワークの捉え方です。さらに、不登校の背景にある原因を、生活体系に落とし込んで考えてみましょう。

例えば、「宿題が出せない」という欠席の理由があったとします。「宿題が出せない」のは宿題をしなかった「本人」の問題だと考える方が多いのではないのでしょうか。しかし、「本

人]の問題だと断言できるかどうか、それは分かりません。例えば、家がゴミ屋敷状態で勉強机も無いため宿題のプリントを学校から持って帰ると家の中でゴミと混ざってしまって発見することができなくなる、という子どもがいます。小さなきょうだいが沢山いるので、妹や弟たちにビリビリに破かれてしまって宿題ができなかった、という子どももいます。このように、「宿題が出せない」という欠席の理由が、「本人」の問題だと断言できるわけではないのです。さらに、ゴミ屋敷や「家族」や「親」の問題であるとも、断言できないのです。地域の人間関係や文化の問題を孕んでいることもあるからです。

助けられ上手になりましょう

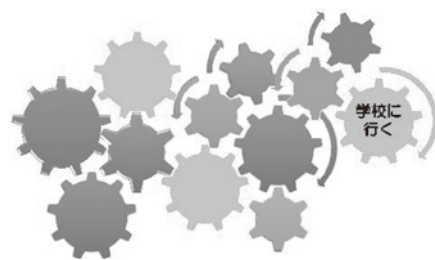
不登校の背景にある「問題」を見つめることができれば、その「問題」に対して力を発揮してくれる専門職や地域住民が必ず存在します。学校だけで、または家族のみで抱え込まず、子どもに寄り添ってくれたり、適切に支援してくれたりする人々と連携・協働しましょう。その専門職の一人がスクールソーシャルワーカーです。また、スクールソーシャルワーカーは多くの社会資源を持っているので、より適切な方々と学校や家庭、子ども自身を橋渡しすることができます。まずは先生や保護者の皆さんが助けられ上手になりましょう。

問題だけを見ないで「ストレングス(強み)」を見ましょう

このように、ソーシャルワークの視点で背景を探っていくと、「問題」ばかりが目についてしまいます。しかし、どんな人にも「ストレングス(強み)」があります。不登校の子どもの「ストレングス(強み)」を見つけることも忘れないでください。

「問題」ばかりを発見しても、解決の糸口はなかなか見つかりません。ソーシャルワークの支援には、「ストレングス(強み)」を活かすという方法があります。

人はシステムの中に生きていますと考えます。システムとは簡単に表現すると右図のように、歯車に例えることができます。「学校に行く」という歯車が止まっているのが不登校です。「学校に行く」歯車を無理やり動かそうとしても、それは難しいです。しかし、歯車は噛み合っているので、動きやすい歯車を発見して、そこに潤滑油をさすと歯車は活発に動き出し、いずれは「学校に行く」という歯車も動くのです。この時、動きやすい歯車とは、「ストレングス(強み)」の歯車です。「ストレングス(強み)」をもっと強化することで、子ども自身のパワーが高まり、子ども自らが動き始めるのです。



ぜひ、子どもの「ストレングス(強み)」を活かす大作戦を立ててみてください。

◆◆著者紹介(野尻 紀恵/のじり きえ)◆◆

日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科教授。スクールソーシャルワーク、教育福祉、福祉教育が専門。「災害時におけるスクールソーシャルワーク」や「教育と福祉の関連をめぐる歴史的研究」などをテーマに研究。著書「子どもの隠された貧困とスクールソーシャルワーカーの役割」(大学図書出版、2021)や論文など、多数執筆。さらには、各自治体におけるスクールソーシャルワーク事業のスーパーバイザーとしても活躍。

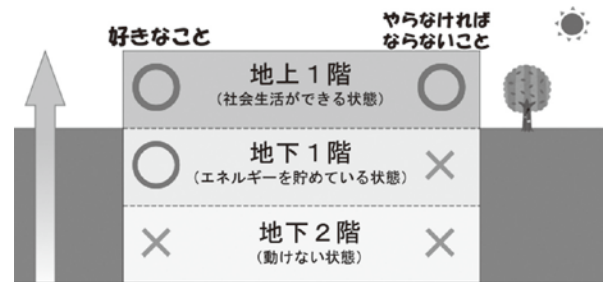
校内サポートルームを子どもたちにとっての安全基地に!

学校に行きづらくなっている子にとって、今必要なことは、さらに頑張ることでしょうか。我慢をすることでしょうか。それとも人との関わりや趣味、遊びなどを通してエネルギーを貯めることでしょうか。

「好きなこと」と「やらなければならないこと」



子どもたちの状態は、地上1階、地下2階の建物に例えることができます。地上の階は、心のエネルギーが満ちていて、「好きなこと」も「やらなければならないこと」も両方できる状態です。一方、不登校の子どもたちは、地下にいる状態です。特に不安定期(混乱期)では、心のエネルギーが空っぽで、この図の地下2階にいる状態です。「やらなければならないこと」はもちろん、「好きなこと」すらできない、動けない状態です。しかし、「好きなこと」や「楽しいこと」ができるようになると、エネルギーが貯まっていき、地下1階の状態まで回復します。



令和4年度「不登校に関する研修会」
神戸松蔭女子学院大学 坂本 真佐哉 教授より

つまり、地下2階の子どもたちに勉強などの「やらなければならないこと」をさせることは、なかなか難しく、本人にとって苦痛となる場合もあります。

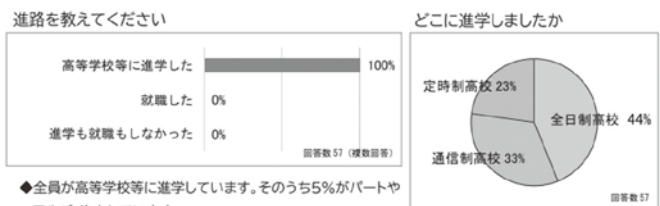
よって、居心地がよく、「好きなこと」や「楽しいこと」に安心して挑戦できる環境が大切になります。校内サポートルーム等が子どもたちにとって安心できる居場所となると、そこを安全基地として、活動範囲の広がりが期待できます。

「社会的自立」に向けて



当所を利用した小中学生の多くが、高等学校等に進学しています。これは、自分の意志と判断で自分の進路を拓いた社会的自立への第一歩と言えます。

将来的な「社会的自立」を考えると、子どもたちが安心できる居場所をもち、そこで自己肯定感を高めたり、自分でできることを広げていったりしながら心のエネルギーを貯めることが、大切なことであると言えます。



◆全員が高等学校等に進学しています。そのうち5%がパートやアルバイトもしています。

◆進学先は全日制高校が約4割と一番多く、続いて通信制高校、定時制高校となっています。

但馬やまびこの郷パンフレット
「先輩からのメッセージ～学校に行きづらいあなたへ～」より